

〔曲目紹介にこと寄せて〕

私は此処で現今の日本のマンドリン界の風潮について言及しておきたい。

大正後期から昭和の初期にかけては日本のマンドリンオーケストラのレパートリーは実に豊富であった。

それが半世紀を疾く越えた今日どうであろう。昔の面影はないと言ってよい。

新しい日本の作曲家のものも順次加わってきてはいるが、失われて了った佳曲が多いのである。

伝統を誇る民間団体でも学生団体でもメンバーの層が順次交替して、昔を知らない為にさして痛傷を感じないし、

大掛かりな大編成のものばかりに取り組んで、

そうしたものがマンドリン合奏と思い込んでいるので、一旦一身上の都合でその場を離れると萎縮して了うケースが多いのである。

楽譜の管理なども永い間には担当者が変わったり、熱心だったり、曖昧（あいまい）だったり、杜撰（ずさん）だったりして、

パート譜が欠けたり、パート譜は在ってもスコアが失われたり、手書譜を照合する原の印刷譜が無かったりして、

そうしたことが重なって何処もレパートリー縮小の道を辿ることになるのである。

マンドリン合奏曲集2集（JMU版パート譜付）より中間部抜粋